

米国の化石燃料資本主義の2柱：イスラエルと湾岸諸国

フェデリコ・フエンテス（『ラテンアメリカの激動：21世紀社会主義の未来』（Latin America's Turbulent Transitions: The Future of Twenty-First Century Socialism）の共著者）によるアダム・ハニエ（中東における資本主義と帝国主義を研究する英国エクスター大学政治学教授）へのインタビュー。

Green Left Newsletter、2025年4月17日、脇浜義明訳 *脚注は訳注



サウジアラビアのムハンマド・ビン・サルマン王子（左）とイスラエルのベンヤミン・ネタニヤフ首相。Photos: Wikimedia (CC By SA)

アダム・ハニエは政治経済学とグローバル開発の教授で、中東における資本主義と帝国主義の研究に重点を置いている。彼の最新の著書は『Crude Capitalism: Oil, Corporate Power, and the Making of the World Market』である。

ハニエは9月5日から7日までメルボルンのナールムで開催される Ecosocialism 2025 会議に出席するためオーストラリアに滞在する。

インタビューの後編では、フェデリコ・フエンテスがハニエに、イスラエルによるガザでのジェノサイドと、中東における湾岸諸国とイランの影響力の拡大について話を聞いた。前編は[こちら](#)。

フエンテス：西側諸国のイスラエルの戦争支援理由に関して様々な説明があります。あなたの考えを聞かせてください。それはいわゆるアブラハム合意と呼ばれるイスラエルとアラブ国との国交正常化工作と関係がありますか。

ハニエ教授：米・イスラエル関係をパレスチナで起きていることとか、イスラエルの指導者の動機などのレンズだけで見るのではなく、もっと広く中東全体の文脈で見るべきです。中東地域が米帝国主義とグローバル化石資本主義にとって持つ重要性を背景にして考察しなければなりません。

米国が支配的資本主義パワーとして台頭したのは、20世紀半ばに化石燃料が石炭から石油に移行したと密接に関連しています。このために、中東 — 石油輸出の世界の中心 — が米国のグローバル・プロジェクトで重要な役割を担うようになりました。中東のイスラエルが、特に1967年戦争でアラブの民族主義運動と反帝国主義運動をやぶったこともあって、米国の中東政策の拠点となりました。

だから、米・イスラエル関係という自動車の運転しているのは米国であって、イスラエルとか米国内のイスラエル・ロビーではありません。

もう一つの米国の中東政策の拠点になるのは湾岸諸国、とりわけサウジアラビアです。米国は、20世紀中葉から湾岸君主諸国と特権的关系を構築しました。これらの国が米国の中東地域同盟のネットワークに留まる限り彼らを守る後ろ盾として行動してきました。これは、石油が確実に世界市場に流れ、かつてあったように「武器」として使われないようにするためです¹。また、湾岸諸国のオイル・マネーが主として西側の金融市場で流れる仕組みでもあったのです。

しかし、時の経過とともに、中東や国際社会における米国の地位と影響力がやや薄れてきました。中東地域で米国以外の国（例えば中国やロシア）の役割が目立つようになり、また地元の国々が自分たちの影響力を高めようと自己主張し始めたのです（例えば、イラン、トルコ、サウジアラビア、アラブ首長国連邦）。

また、重要な現象として、湾岸諸国の石油と天然ガスの輸出先が西洋から東へ、主として中国と東アジアへと、東方移動したことがあります。これに対応して、米国は中東地域の二つの拠点、イスラエルと湾岸諸国に対して、政治的、経済的、外交的関係を正常化させて、両者を結びつけて、パレスチナを排除したイスラエル・アラブ和解を図るアブラハム合意を発展させようとしていました。

ガザ・ジェノサイドをこういう大きなレンズを通して見ることも必要です。10月7日のレジスタンスとその後のジェノサイドの中で、さらにパレスチナ人をパレスチナから追い出す計画の中で、米国はイスラエル・湾岸諸国関係の正常化をモデルにして中東地域の再編を目標にしています。

フェンテス：でも、トランプのガザ民族浄化提案で、中東地域のアラブ国のイスラエルとの関係正常化は困難になっているのではありませんか。

ハニエ教授：ガザのさらなる民族浄化に関するトランプの提案は、明らかにイスラエルの政治的スペクトルの多くに共鳴します。しかし、これには多くの障害があります。まず、ヨルダンやエジプトのような国は、これほど多くのパレスチナ難民が自国の領土に追いやられることを望んでいないという事実です。

しかし、サウジアラビア、ヨルダン、エジプトのような国は、米国のプロジェクトと根本的に異なる立場にあるわけではありません。原則的に、サウジアラビアの君主制はイスラエルとの関係を正常化することに問題はなりません。同時に、ガザやその他の場所でのパレスチナ人の敗北と、パレスチナ人のある種の黙認なしに、このプロジェクトを進めることは明らかに非常に困難です。

このジレンマに対する潜在的な解決策は、ヨルダン川西岸におけるパレスチナ自治政府（PA）という形で見出されています。PAが重要なのは、パレスチナの政治家とパレスチナの資本家階級の層を作り出したからです。彼らの利益はイスラエルとの融和に結びついており、地域の正常化を促進しようとしています。

だから、アラブ諸国がトランプが提案しているような民族浄化と正常化に何らかの形で遺伝的に反対していると解釈すべきではありません。

フェンテス：この地域で影響力を高めようとしている湾岸諸国の役割をどう説明しますか。

ハニエ教授：米国の力が相対的に弱まっていることに関連して、湾岸諸国を含む他の主体は地域に独自の利益を示そうとしています。様々な武装集団や政治運動を支援したり、様々な政治勢力を受け入れたり（カタールの事例が際立っている）、エジプトやリビアなどの国への資金援助、イエメンやスーダンなどへの軍事介入や、港湾や物流ルートを管理することなど、彼らはさまざまなメカニズムを使ってきました。

これには、2011年のアラブ騒乱の余波が関係しています。この騒乱は地域全体に急速に広がり、エジプトやチュニジアなどの長年の独裁政権を打倒しました。湾岸諸国は、騒乱後のこれらの権威主義国家の再建に大きな役割を果たしました。

¹ 1973年の第4次中東戦争を受け、OPEC諸国がイスラエルが占領地から撤退するまで、イスラエル支持の西側諸国へ石油禁輸を決定したことを指す。日本の政府や企業がたちまちパレスチナ寄りになった。私たちはPLO東京事務所設立を認めよという運動や、大阪でパレスチナ展を開催する運動をしていたが、政府も自治体も企業も協力的で、カンパが企業からかなり集まったのを記憶している。

湾岸諸国、特にサウジアラビアとカタール、サウジアラビアと UAE の間にもライバル関係があります。両国は必ずしもすべてにおいて意見が一致しているわけではなく、時には対立する側を支持することもあります。例えば、スーダンではサウジアラビアは現在進行中の内戦でスーダン軍を支援し、UAE は緊急支援部隊を支援しています。

しかし、相対的に衰退しているにもかかわらず、米国は依然としてこの地域の主要な帝国主義大国です。米国は依然として、軍事的にも政治的にも、湾岸諸国の政権にとって最終的なバックストップです。

フェンテス：「準帝国主義」という用語は、通常、帝国主義大国に従属しているが、その勢力範囲内で一定の自治権を持って活動している国を指しますが、湾岸諸国を理解するのに役立つでしょうか。

ハニエ教授：準帝国主義という用語は、湾岸諸国が象徴するものの一部を捉えることができますが、湾岸諸国は必ずしも西側諸国と同じように軍事力を誇示する能力を持っていません。湾岸諸国が軍事力を増強していないわけではないが、依然として大部分は代理店を通じて活動しており、米軍の傘に大きく依存しています。

とはいえ、湾岸諸国からより広い地域、そしてアフリカ大陸への資本輸出は非常に顕著です。これらの資本輸出は、国境を越えた価値移転を反映しています。また、経済が開放され、土地やその他の資産が民営化された過去数十年の間に中東を席卷した新自由主義の波の中で、湾岸諸国を拠点とする複合企業が大きな恩恵を受けてきたことも非常に明らかです。銀行、小売、アグリビジネスなどのセクターを地域全体で見れば、湾岸諸国を拠点とする国家と民間の複合企業の両方が見られます。

だからこそ、国家間の紛争だけでなく、資本主義の利益と資本蓄積のパターンの文脈でこの地域を考えることが非常に重要なのです。

フェンテス：イランは、この地域における反帝国主義の「抵抗の枢軸」の先頭に立っていると考える人もいます。イランの役割をどのように見えていますか？

ハニエ教授：「抵抗の枢軸」という用語は、国内的にも地域的にも、利害関係、社会基盤、政治との関係が異なる非常に異質な関係者の間で、あまりにも一致していることを意味するため、誤解を招きやすいです。基本的には、ジョージ・W・ブッシュ前米大統領が「悪の枢軸」で負の符号を付けたところにプラスの符号を付けようとしています。これは政治のやり方としては単純すぎます。

われわれは、イランあるいはより広範な地域(それが直接であれイスラエルを通してであれ)に対する西側帝国主義のいかなる介入にも明確に反対する必要があります。この介入とは軍事介入だけでなく、経済その他の形での介入をも意味します。

イランの場合、制裁は大きな問題です。同時に、われわれはイランが資本主義国家であり、独自の資本家階級を持ち、地域やより広い範囲で独自の目的を持っていることを認識すべきです。湾岸諸国と同様に、イランは地域での力を誇示しようとしています。

確かに、イランはこの地域に対する米国のプロジェクトの外側に位置しています。しかし、イラン国家の資本主義的性格を認識することは、イランの進歩的な社会的・政治的運動と連帯しなければならないことを意味します。これらの運動は、反帝国主義政治の枠組みの中で、社会主義者として私たちが共に歩むべきものです。

出発点は、国家や運動について一貫して反資本主義的であることです。つまり、資本主義政府に政治的支援を与えないことを意味します。私たちは、帝国主義の介入に反対しながら、闘争中の人々と連帯することができ、中東の資本主義の複雑さのある種のマニ教的な二元論の地政学に還元することはできません。